

## 日本人の大学・大学院生世代はどのように対中イメージを形成するのか

中村 元樹

2010年9月の尖閣諸島沖漁船衝突事件以降、日本人の中国に対するイメージ（以下、対中イメージ）は悪化し続け、現在の日中関係は過去最悪とまで言われる状況となっている。日本人の中でも現代の若者は「右傾化する若者」と呼ばれ、これからの日本社会を担う若者世代を中心に保守化、排外主義が高まっていると述べる人もいる。一方、内閣府が毎年実施している「外交に関する世論調査」によれば、中国に対して親しみを感ずる割合は依然として低いものの、20代の若者世代は中国に親しみを感ずる割合が他の世代と比較して高いという結果が示されている。これらの違いから、若者の対中イメージの実態について興味を持った。

日本人の対中イメージに関する研究は数多くあるものの、尖閣諸島沖漁船衝突事件以降の若者世代を対象とした対中イメージに関する研究は見当たらない。本研究では、「対中イメージが良い（悪い）人はどのような人か」という開かれた仮説を設定し、現在における大学・大学院生世代の日本人の対中イメージの形成に寄与する要因を明らかにするとともに、良い（悪い）対中イメージを持っている人はどのような人なのかを分析し、その属性を明らかにすることを研究目的とする。

本研究では主に若者世代にあたる大学・大学院生世代の日本人を調査対象としてインタビュー調査を実施した。プレ調査の結果から、対中イメージの形成には被調査者のライフヒストリーとメディア接触が深く関わっていることが示唆されたため、質問項目には対中イメージに関するものに加え、被調査者の属性、ライフヒストリー、メディア接触に関する質問を設定した。

対象となる12名全員のインタビュー結果からキーワードを抽出し、KJ法を用いた分析を行った結果、対中イメージの形成には直接的経験と間接的伝聞の二つの要因が影響していることが示唆された。また、12名それぞれのインタビュー結果について分析したところ、対中イメージとして「声が大きい中国人」「厳しい中国政府」など負のイメージが目立つものの、それらのイメージの捉え方によって「悪いイメージを持つ人」と「安易に悪いイメージを持たない人」の二つに分類することができた。前者は他者からの影響や受動的なメディアからの影響が大きく表れる一方、後者は海外への渡航経験や中国に対する興味・関心の高さによる異文化への理解から、国家と国民を区別してとらえる傾向があることが分かった。また中国に対する興味・関心の度合いとメディアからの受動的・能動的な情報の取得、メディアに対する信頼度、中国への渡航経験の有無については相関するということが分かった。二つの結果を合わせたところ、間接的伝聞による影響が強い人の方が「悪いイメージを持つ」、直接的経験を重視する人の方が「安易に悪いイメージを持たない」ことが明らかとなった。

（指導教員 後藤嘉宏）